

学校経営のポイント

“子どもが生きる学力”開発の取組み

若井 彌一

平成8年7月19日の中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」で強調された「生きる力」が教育改革のキーワードとなつてから、約10年を数えようとしている。

次々と新語（最近では、学校力 教師力 人間力など）が作りだされるなかで、「生きる力」は、なお死語とならずに生き続けている。

多様な関係のなかで“聡明に生きる人間”像

「生きる力」という、特別な新鮮さを感じさせることもない言葉が答申のなかで強調され、その後生き続けてきたのは、この言葉に説得力があるからであろう。

答申が述べている「生きる力」は、「全人的な力」であり、内容的には概略的に言うならば、自ら課題を見つけ、学び、考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決していく力、自己を律しつつ、他の人々と協調し、他の人々を思いやる心、感動する心などの「豊かな人間性」とたくましく生きるための健康と体力とを併せた総合的あるいは包括的な力を意味する。

このように、抽象的ではあるが、総合的あるいは包括的な力を有する人間像に迫る試みが、わが国の学校教育において多様な教育の方法（教育課程の編成と実施）によって展開されてきた。

あらためて確認するまでもないが、われわれ人間は、多様な人々、人間が作り出した社会的な仕組み（組織・機関・規範等）と生産物、人間を支えつつも、ときにわれわれを襲うことのある自然界とかかわりをもちながら生きている。インターネットの利用・活用によって、一人の人間がかかわりをもつことのできるこれらの他者（上記の ~ を

包含する広義の他者）の範囲は、飛躍的に拡大している。そして、人間が「生きる」という生涯プロセスは、多様な人々、社会的仕組みと生産物、自然界とのかかわりの発生・形成 拡充と精選 終焉という一連の流れとしてとらえることができる。

「よりよく生きる」ということは、一人の人間が、多様な人々、社会的な仕組みと生産物、自然界とのかかわりを、主体性を保持しつつ、形成・拡充・精選していく積極的な生き方を意味するといえよう。

子どもが生きる学力「関係力」への取組み

ところで、現実には眼を転ずると、家庭や地域における人間関係の弱さに起因する事故・事件、国内外の対立的な関係に起因する紛争・戦争等々がほとんど日常的に発生している。

このような現実から脱却し、わが国の憲法が掲げる「基本的人権の享有」「政治道徳の法則」「人類普遍の原理」等の理想の実現は「根本において教育の力にまつべきもの」である（教育基本法の前文）。

われわれ教育の世界に身を置く者は、このような教育の重い使命を強く自覚し、子どもたちが国際社会において自主的・自発的精神と自他の敬愛の精神をもって聡明に生きていくことのできる総合的な力の育成と開発に挑むことが求められている。

（わかい・やいち = 上越教育大学教授・附属小学校長併任）

上越教育大学附属小学校

公開研究発表会

関係力～「子どもが生きる学力」への挑戦

日時；6月22日（木）・23日（金）

問合せ先；上越教育大学附属小学校

TEL 025-523-3610 FAX 025-523-5098

●6月15日発売！● 上越教育大学附属小学校【著】 B5判 215頁・定価2400円 教育開発研究所・刊
子どもに真の学力をつけるために！ 過熱する学力論争へ上越教育大附属小が実践的提言！

「関係力」とは！ 心豊かに生きる子どもを育む教育課程の創造

『関係力～「子どもが生きる学力」への挑戦～』